

鉄鋼流通、ここにあり

座談会 産業界への使命と貢献

出席者
■西村達夫・西村鋼業社長
■湊義明・野村鋼機社長
■藤澤雄雄・藤澤鋼板社長
■中村昭夫・中村鋼材社長
(司会＝藤原直(産業新聞社))

鉄鋼流通業は長い歴史を持ちます。戦前、戦中、戦後と先達の開いてきたエピソードも交え、これまでの歴史を振り返る機会もなりましたが、当社の足跡をたどると、戦後の混乱期から立ち直り、50年の朝鮮戦争を契機に好景気となり、一気に鉄鋼需要も拡大。鋼材価格も跳ね上がったと聞いています。この時代の好景気が戦後、日本経済を復興させ、鉄鋼市場も大きく飛躍していきま

鉄鋼業界では原料価格急騰を受けて値上げに動き始めたほか、低迷していた国内需要にも回復の兆しが見えてきた。そうした中で鋼材流通ではメーカー値上げに対する価格転嫁や事業高度化、人材確保と育成など課題が山積する。産業新聞創刊80周年にあたり、西村達夫・西村鋼業社長、湊義明・野村鋼機社長、藤澤雄雄・藤澤鋼板社長、中村昭夫・中村鋼材社長の4氏による記念座談会を実施。戦後復興から日本経済を支えた鉄鋼流通の足跡から、役割、今後の課題と歩むべき道筋について語っていただいた。(順不同、敬称略)



左から中村、湊、西村、藤澤の各氏

に跳ね上がった。鉄が売れ、足りなくなった。鉄成金などと呼ばれることもあった。平鋼は量的に動く日形は異なり、先代からある少量、多サイスト、他社が面倒くさがる領

リーマン後を耐え抜く

域に力を入れ、利益率を高めるスタイルを貫いてきた。このスタイルを守ってきたこと、生き残ってきたこと、生きたのだと思う。顧客との長い付き合いを保ち、継続する商売を続けてきた。この根底には顧客との信頼関係があり、社員も信頼を大事にして顧客への対応する商売の仕方を、日々学んできた。中村「当社の創業は23年6月で、この3カ月後の9月には関東大地震が発生した。このため債権回収が困難になった。だが、当時の本所の方々に助けていただいた。今日につながる礎を築けたと聞いている。皆苦しい中で、きちんとお支払いいただけたのだとい

に「鐵雄」と名付けた。中村「過去の振り返ると、一番変動が激しかったのは08年のリーマン・ショックですか。西村「仙台を立ち上げた直後、いざ販売開始という時にオイルショックに見舞われたが、いろいろと好不況を繰り返した中で、最終的には誰かが大きかったのが大きい。リーマン・ショックは大きな構造変化をもたらした。中村「第1次オイルショックのころはまたリーマン後1万円にまで急落した。自動車産業の海外シフトにも拍車がかかった」

う。鉄鋼流通業の中には仲間意識や、義理人情を大切にしている。西村「本所界隈の鉄鋼流通業は在庫がないと続けた。高度成長では毎年経済成長率は10%前後の伸びを記録し、粗鋼生産も55年度の979万トンから73年には1億2000万トンにまで伸びた。五輪に合わせ、インフラ整備が進む、重厚長大産業が全盛期だった。われわれの商売も多く仕入れ、大量に販売する形が主だった。今思うと大変だったが、良い時代でもあった。西村「中国の過剰生産の影響も大きい。リーマン・ショックは全世界経済を巻き込んだ出来事だけに、われわれへの影響も大きかった。藤澤「鋼材への影響という意味では、量も激減したが価格への影響が大きかった。リーマン・ショック前の価格は大幅に下落、スクラップはトン当たり7万円まで上昇したが、リーマン後1万円にまで急落した。自動車産業の海外シフトにも拍車がかかった」

創刊 80周年 特別企画